



統合失調症当事者の症状論

村松太郎 編著
 中外医学社
 2021年2月 240頁
 本体価格 3,000円+税

さまざまな点でユニークな書である。

本書は、統合失調症当事者の「語りの中の要素抽出の段階から見直しを図り、多彩に見える統合失調症の症状の統一的理解を目指す症状論の試みである。著者も述べているようにこの手法自体は伝統的なものではあるが、当事者の語りの場が外来診察室や病棟のベッドサイドではなく、サイバー空間であるという点にまず驚かされる。著者は自身が1997年に開設したインターネットサイト「Dr林のこころと脳の相談室」に寄せられた4,000以上の当事者の言説を分析対象としている。この着想には感服した。なぜなら、インターネット上の匿名の投稿であれば、昨今詳細な症例報告に当たって悩ましい個人情報保護の問題はおのずとクリアされるし、何よりも、匿名性が担保されているがゆえに当事者が実に率直に自身の体験をつまびらかにしているからである。そこには対面診察ではおそらく得られないであろう多くの貴重な情報が溢れており、著者はその当事者の具体的で生き生きとした語りを丁寧に読み解きながら、幻聴論、幻視論、妄想論、他律論、診断論と段階的に読者を「統合失調症の症状の統一的理解」に導いていく。当事者の生の言葉が多く引用され、そこに通底する病理の特徴が読者にも見えるため、抽象的な speculation に陥ることのない明快な精神病理学書となっている。

内容にもユニークな視点が多い。1章の「幻聴論」でも最もインパクトがあるのは、教科書的に知覚/感覚の障害とされる幻聴について「聴覚性は本質ではない」と喝破している点であろう。もともと自分の思考であるものが声となって、あるいは意味をもつもの、表現しがたい力として、外部からと信じられる未知の体験を、当事者は「聞こえる」としか表現できない。しかし聴覚性を帯びたこれらの

体験（著者は「幻聴系」と命名する）の本質は、聞こえるかどうかではなく、思考が起点である自分から逸脱して外部に定位されること、「起点の逸脱」にあるとする。3章の「妄想論」では、妄想の形成過程は「何か」（漠然とした無定形の不安のみの段階）、「これか」（「何か」のなかからある特定のテーマが姿を現す段階）、「そうか」（「これか」を出発点に正常心理と異常心理が錯綜しつつ妄想が発展していく段階）の3段階に分かれることを、ハレー彗星に関する妄想をもつ当事者の語りから解説する。そして、このように形成される妄想と幻聴系・幻視系との間には、「内界の確信が外界の変質の感知によって強化され、外界の変質感知は内界の確信によって強化されるという円環構造」があるという。

ここから本書で最も興味深い4章で「他律論」が展開される。著者は、「起点の逸脱」は当事者の側からとらえれば「他律」（島崎敏樹）であるとし、この概念で運動・感情・思考・意志・知覚などあらゆる観点から統合失調症の各症状を分析する。たしかにこの分析によって、操作的診断基準が羅列するだけの症状全体が「統一的」に理解できるため、「他律が統合失調症の基本障害である」とする著者の仮説には説得力が感じられる。さらにそれが最新の Sense of Agency（まだ訳語がないため、著者は「主律感」と訳している）に関する脳研究と接点をもつという指摘は、統合失調症の生物学的基盤の解明につながるのではないかと期待を喚起し、実に exciting である。

なお精神鑑定に従事する評者には、「他律論」の注にある司法精神医学者の編著者によるものと思われるコメントが耳に痛かった（と同時に痛快だった）。いわく、聴覚性は幻聴という症状の本質ではないにもかかわらず、刑事事件において裁判所はしばしば「命令する声」としての幻聴の有無やその内容の一言一句に拘泥するが、この「統合失調症の症状を健常者が追体験できる範囲内で理解しようとする時に発生する深刻な誤謬」の責任は、十分な説明をしていない精神医学、すなわち鑑定人の側にある、と。その通りだと思う。だが、そもそも十分な説明ができるほど、われわれ鑑定人は統合失調症の精神病理について深く理解しているだろうか。そこまで丁寧に当事者の語りに耳を傾けてきただろうか。そう自分自身に問い質し、身を引き締めたのだった。

（田口寿子）